

# 小川洋子『ミーナの行進』が描く一九七二年

——〈模像〉のノスタルジー——

佐々木 亜紀子

はじめに

『ミーナの行進』<sup>(1)</sup>は二〇〇五年二月十二日から二十四日まで『読売新聞』に掲載され、翌年中央公論社より刊行、同年「平成十八年度谷崎潤一郎賞」を受賞した。

「選評」<sup>(2)</sup>を読む限りでは、満場一致で選ばれたわけではないようだ。高く評価したのは井上ひさしと筒井康隆である。井上は「物語による物語の関節外しの実験であり、それでいて、よくできた小説でもある」と述べ、筒井も「独特の文学的世界の構築が素晴らしい」と評している。これに対し、池澤夏樹は「諸手をあげて賛成ではなかった」と最初に述べたうえで「ファンタジー」の「偏在」を指摘し、「文学にもっと野放図なものを期待する」と結んでいる。

その後の研究・評論では、箕野聡子が小説に描かれた芦屋という舞台の実在性の裏づけを阪神地域の歴史や文化に見出すと試み<sup>(3)</sup>、川本三郎は「お伽話の桃源郷」<sup>(4)</sup>としている。

以上のように『ミーナの行進』は井上評と池澤評のように両極に評価がわかる小説であり、箕野論と川本論が指摘するような実在性と「お伽話」という二つの要素をもつ小説なのである。

本論では、岡野八代らのケア論を援用して、母子の母とミナナの母に注目し、女性ばかりが住む「洋館」の意味を検討する。そのうえで、芹屋の描出に関わる評価の根本に、シミュレーショニズムという方法が関わるものと考え、一九七二年の物語を分析する。そして一九七二年を「聖」なる時間として語る二〇〇五年の母子の語りの特徴から、小川洋子の小説の方法についても検討する。

## 一・二人の母

小川洋子の小説にはシングルマザーが多く登場する。そして、それらの母がシングルである理由は、死別、離別、非婚など様々であり、シングルマザーになったあとに選ぶ道も様々である。たとえば、「シュガータイム」(『シュガータイム』中央公論社、一九九一)では、航平の母は主人公の父と子連れ同士の再婚をし、『貴婦人Aの蘇生』(朝日新聞社、二〇〇二)では主人公の母が、亡夫の勤め先の大学の教員住宅を出て息子と二人で亡夫の実家へ身を寄せる。また『博士の愛した数式』(新潮社、二〇〇三)の主人公「私」は、非婚のまま息子を生き、家政婦になって生計を立てている。

厚生労働省の「平成28年度全国ひとり親世帯等調査結果の概要」<sup>5)</sup>によれば、母子家庭数は一二三・八万世帯あり、「25年間で、母子世帯は1.5倍」になっている。しかし就業率が八九・七%であるにもかかわらず、平均年収は二百万円で貧困率が高い。赤石千衣子はその原因として、出産・育児と就業とを両立させるため非正規雇用など不安定な雇用が多く、住宅ローンを組むこともできず、「住まいの貧困」を抱えていることなどをあげている。<sup>6)</sup>

小川の描くシングルマザーは、母子家庭数の増加やその生活苦などが反映されているとみるべきであろう。亡夫の実家の庇護を受ける『貴婦人Aの蘇生』の母には、彼女が抱える「住まいの貧困」問題がある。また『博士の愛した数式』の主人公が「皆が敬遠する面倒な顧客を押し付けられても、組合長に不平など漏らしはしなかった」と従順に「家政婦」<sup>7)</sup>と

いう仕事を続けるのも、経済上の問題が大きいだらう。

この主人公のように、結婚しないでシングルマザーになった人は、先の調査<sup>8)</sup>では、七・八%になった。これは死別によって「ひとり親」になった割合の七・五%を初めて越える結果である。にもかかわらず、赤石によれば「寡婦控除」という死別ひとり親や離婚ひとり親に適用される所得控除が（婚姻歴のない）非婚シングルマザーには適用されない<sup>9)</sup>ため、税制などで不利であるという。期せずして独身で育児をすることになったシングルマザーは、育児をはじめとする生活上のパートナーがいけないというだけではなく、片腕に子どもを抱いたまま、生産の競争に参入しなければならないのだ。現実的にはその自立は困難を極めている。

しかしのちにも述べるように、小川作品では、シングルマザーとその子どもの負の側面、すなわち孤立、貧困などをリアルに描くという方法はとられていない。本論でとりあげる『ミーナの行進』でも、主人公朋子の母はシングルマザーである。現実的には苛酷な情況と想像されるが、物語の主な時間である一九七二年は、川本のいう「桃源郷」のように語られている。

朋子の母は、夫を亡くした後、「縫製工場の勤めと洋裁の内職で家計を支えて」、小学一年生だった朋子を育ててきたという。そして朋子の中学入学を機に「改めて長期的な展望に立って人生を見直し」、「洋裁の技術をアップさせ、より安定した仕事に就くため、東京の専門学校で一年勉強する決心」をする。一人娘の朋子が「一九七二年から七三年にかけて一年あまり」、芦屋の伯母の家で過ごすという経験はこうして用意されたのである。

朋子の母とミーナの母は、一年違いで娘を生んだ妹と姉であるが、富裕なミーナの母に比べて、朋子の母は経済的に逼迫している。主な原因はもちろん母子家庭であったことだが、夫が存命のころからこの姉妹には経済的格差があったことが窺われる。

たとえば芦屋の豪邸に住むミーナの父がベンツに乗っていたのに対し、朋子の父は「古ぼけた木造家屋」の「借家」に

住まい、自転車の「荷台に鞆をくくりつけ、役所へ勤めに出掛け」、休日には娘を乗せてサイクリングをしていた。また朋子は「生まれてから一度も、動物園と名のつく場所には行ったことがなく、クリスマスツリーも「おもちゃでさえ、岡山では飾ったためしがなかった」という。ただし時代状況から考えれば、朋子の岡山での暮らしが特別に貧しかったのではなく、当時のつましい暮らしの範疇という可能性もある。

だが夫亡き後はこの格差は開く一方であった。朋子の母は「縫製工場の勤めと洋裁の内職」というダブルワークをしても、一九七〇年の万国博覧会に「仕事のせいで」朋子を連れていくことができない。東京へ行つてからも、「十円玉がたまつたら」電話をするという儉約ぶり。クリスマスに「インフルエンザにかかってしまい、帰つてこられなくなった」のも、あるいは節約のためもあったのかと邪推したくなる。夫を亡くし、支援の乏しいなかで孤軍奮闘するさまが想像できる。朋子の語りからは、この母についてはわずかな情報しか得られないものの、一人娘との暮らしを一時手放さなければ「長期的な展望」がみえない苦境にあったことは確かである。

この窮状にある妹に手を差し伸べたのがミーナの母である。結婚を経て、住む場所も環境も隔たった妹の娘、それも一度も会ったことのない姪を一年間預かるに至った経緯は、詳しくは語られない。だが姉妹の実家が一度も話題にならない以上、「伯母さんの好意に甘えるしかなかった」ということは確かだ。

伯母は飲料会社の三代目社長の妻として、「芦屋の山裾に、千五百坪の土地」に建てられた「スパニッシュ様式の洋館」に住み、住み込みのお手伝いさんをおいて裕福に生活している。だが幸福というわけではない。夫は「もう一つ別に帰るべき家」があり、社交的な息子はスイスに留学し、病弱な娘と日本語の不自由なドイツ人の姑とともに、ひっそりと豪邸に暮らしているのである。この伯母と伯父との結婚の経緯は次のように語られている。

飲料水会社の二代目社長だった（伯父の：引用者注）お父さんは、二十代の半ばでベルリン大学へ留学し、薬学を

修め、ローザさんを見初めて結婚した。(中略)伯父さんの人生もおおむね、お父さんの歩みをなぞるように展開された。(中略)ただ、一つ違ったのは、結婚相手をドイツで見つけてこなかったことだ。伯父さんは工場の開発室でピーカーを洗ったり新製品の味見をしたりしていた、研究補助員の伯母さんと結婚した。(中略)若夫婦は、子供を授かるまで二年も待つ必要はなかった。それどころか結婚式の七か月後には、男の子龍一が生まれていた。(傍点は引用者に拠る。以下同じ)

中学生だった朋子が知り得る表現で語られてはいるが、伯母との結婚をめぐることだけが、伯父がその父の足跡を辿れなかったことであるかのようにも読める。伯母との結婚は、龍一を身籠ったという理由と仄めかされているようだ。伯母の側から言えば、ピーカーを洗っていた「研究補助員」が、社長の御曹司に見初められて妊娠し、いわゆる玉の輿に乗った結婚だったということだろうか。

朋子から見てもそれぞれ非の打ちどころのない伯父と伯母ではあるものの、その印象は対照的である。伯父は初対面の時「皺一つないグレーのスーツに上品なネクタイ」をし、いつも「神経の行き届いたお洒落な格好」をしている。自分の身なりに限ったことではない。朋子の制服を誂える時にも、「実益を優先」して大きめのサイズを選ぶことはなく、「きちんと身体に合わせ」て作るよう店員に指示するような人である。だが伯母は「ほっそりした身体」で「優美な姿勢を保」つことのできる人ではあるが、「お洒落や外出に縁遠いのは明らか」で、クローゼットのなかにある数の乏しい洋服は「主張がなく、目立たないでいることを主眼に作られたものばかり」である。「人を朗らかにする達人」の伯父と、「底が深い」「静けさ」の伯母。「家に帰ってこないくらいのお出かけ好き」の伯父と、「出不精」な伯母。

もちろん、氣質が対照的であることは、夫婦関係にとって必ずしも悪いことではない。現に伯母は「伯父さんの冗談に一番うれしそうに微笑む」人でもある。だが、喫煙と飲酒に沈潜して「誤植探し」をする孤独な姿は痛々しい。朋子が伯

父の会社で見かけた「車両運行記録簿」には、「社長車」の行き先が毎日「江坂ロイヤルマンション」と記載されている。それは伯父が「平凡な名前」の女性と「食堂や雑貨屋が並ぶ通りの裏道」にあるうらぶれたマンションに住んでいることが公然の秘密になっているからだ。夫の会社の元社員であった伯母にとって、それは耐え難い屈辱であろう。

伯父は別宅住まいであり、龍一はスイスへ留学し、「洋館」はもはや女性だけの生息空間になっている。それでも伯母が「洋館」に住み続けるのは、母親として病弱な娘ミーナのケアをしなければならぬ役割があるからだ。むしろミーナへのケアが常時必要なのではないが、やがて「ローザおばあさん」という日本語が不自由な高齢の姑のケアも予想される状況である。伯母はいわばケアの待機要員として「洋館」にいななければならないのだ。夫の去った家で、その老母と暮らす理不尽に耐えるのはなぜだろう。夫への愛情なのか意地なのか、あるいはただ「洋館」から出てゆく力すらもはやないからなのか。中学生だった朋子の語りは、伯父伯母の不幸な関係に踏み込むことはなく、伯母の苦悩の内実に迫ることもない。あたかもそれらの負の側面を忌避するように、「洋館」の幸福ばかりを語り続けている。

## 二．ケアの場としての「洋館」

前節において、ミーナの母をケアの待機要員と述べたが、(ケア)とは介護、看護、介助、育児など、意味する領域は広い。ここでは岡野八代論<sup>⑩</sup>から、特にミーナの母が担うケアの物語における意味について検討したい。

岡野が「ケアの倫理」を論ずるなかで批判的に考察するのは、公私二元論である。近代は公と私に領域を二分し、公領域においては自立した主体像が求められ、その前提のうえに人が平等で自由であるとされてきたという。だが人間は一生のうちに、乳幼児期や老齢期など、誰かのケアに「依存」する時期を必ず持つ。それにもかかわらず、「依存」は不可視化され、「依存」役割を引受ける存在(主に「母」や女性)とともに私領域に排除されてきたという。ケアという行為、言い

換えれば「依存」が必要な人を支えるという行為は、公の場から押し出されて私事化され、女性ジェンダー化されているのである。そしてその私事化されている育児は、単純な公との二分ではなく、実は公領域の支配下にあるという。

たとえば、「洋館」からは伯父も長男龍一も去り、その内側は、ケアを受ける者とケアをする者だけが住まう女ばかりの私領域であることは、象徴的である。そして夫を亡くした朋子の母の境遇をみれば、私領域の育児を手放さずに公領域の経済活動に参入することの困難は明らかである。

またエヴァ・フェダー・キティは、「依存が不可避な人をケアする仕事」を「依存労働」とし、「依存」を包摂する理論構築の必要性を論じるなかで、「依存労働」が公的領域から締め出されていることを指摘した。<sup>①</sup> 加えてキティは、「依存労働」者すなわちケアをする人が、公領域に支配される私領域で、経済的依存や精神的依存を被り、弱体化されることを指摘し、それを「二次的依存」「派生的依存」と名づけている。

伯母はケアの待機要員として、夫の経済力の下にある私領域の「洋館」のなかで、いわばこの「二次的依存」状態に陥っているのである。ミーナに「こんな趣味の悪いカーテン」と悪態をつかれる部屋は、印刷物の誤植を探し、「おばあちゃまに隠れてお酒を飲む」場所だ。伯母の精神的危機を象徴するように、その部屋の「絨毯は焼け焦げだらけ」である。スイスへ帰る龍一が「ミーナを頼むよ」と朋子に妹を託したとき、朋子は「ミーナが味方が必要とするとき（中略）伯母さんはお酒に酔っているかもしれません。けれど私なら、いつでも味方になれます」という「気持ちを含めて、うなずいた」という。伯母は皮肉なことに、待機するだけの「洋館」のなかで、ミーナにケアが必要なときに、本来の役割が危ぶまれるほど飲酒癖が昂じていたのだ。

そのような状況であるにもかかわらず、伯母が姪の朋子を預かった「好意」は、富裕な姉の「好意」以上の意味をもっている。思いがけなくも夫を亡くして自立せざるを得ない状況に置かれた妹に、夫に去られながらも「二次的依存」状態から脱出できない自分自身の夢を託したのだ。朋子が「伯母さんの横顔が母によく似ていると感じた」というように、姉



妹は結婚する前は、ローザとその双子の姉のイルマと同じく、月が仲良く並んだ「朋」の字のような姉妹だったのでろう。箕野の「ミーナは、伯父さんの子ではあるが、伯母さんの子ではないのではないか」という指摘は可能性の域を越えないが、少なくとも伯母の結婚生活が幸福ではないことは明白である。朋子の母が役所勤務の堅実な夫と結婚したのは、予定外の妊娠のために玉の輿に乗って「洋館」に住むようになった姉の不幸な結婚生活を知り、その轍を踏まないという選択の結果だったとも考えられる。朋子の母はその姉とは対照的な結婚を選んだのである。

だが、堅実と思われた役所勤めの夫は、「手遅れの胃がん」で妻と小学一年生の娘を遺して亡くなる。運命はこの姉妹から、華やかな三代目社長の夫も堅実な役所勤めの夫も奪ってゆく。だが朋子はこの二人の母が不運を恨む様子を語らない。それは朋子が一九七二年の中学一年生として語っているからである。

もともと伯父の不在はこの「洋館」にとつて不可触の話題である。新神戸で朋子を出迎えた伯父は、三日後には朋子を中学の制服の注文にベントで連れ出し、「クレープ・シユゼットをご馳走」し、その翌日から不在となる。すると伯母は「ますます無口に」なり、「彼女の唇は煙草をくわえているか、ウイスキーで濡れているかのどちらか」になる。だが「誰もが食卓にできた一人分の空白に気づかない振り」をして過ごしている。

伯父はミーナが深夜に「喘息の発作」で病院に運ばれても帰らず、結局、朋子の入学式になっても帰らない。その伯父に代わって、式に同行したのは伯母だった。「朋子を一人で行かせたりはしません」と「いつになくきりつとした様子」の伯母は、飲酒と喫煙をしている「あの雰囲気は、どこかに上手に隠し」ていたという。朋子の入学式に帰らない伯父に代わって、伯母は待機要員として、立派にその役割を務め、頼もしい一面を見せた。

その後、四月二十九日の夕方に「六甲山ホテル」のコックたちを引き連れて帰った伯父は、「寝室ではなく、書斎のソファで「一人で休む」ことになっている。破綻した夫婦関係を見てもみぬふりをする家族、特に伯父の母であるローザの心痛は深いはずだ。住み込みのお手伝いである米田さんがいるとはいえ、一人息子が家を出てその妻だけがとり残されている状



況である。やがてケアを必要としたときに頼るのは、この「嫁」しかないのだ。「親族全員が、第二次大戦中にナチスの強制収容所で亡くなった」ローザに帰る故国はない。幼い朋子の周囲で話題になるとき添えられた「外国の人と結婚した……」という憧憬の一句の裏側には、不条理な運命を背負うローザの人生がある。

伯父が不在の間、修理品が書齋の机上に増えていくのは、この「洋館」が壊れ始めていることを象徴している。修理品として差し出される家族の訴えに対して、もはや修繕で終わらせるべきではないはずだが、伯父は綻びを繕うことで暫定的に現状を保持している。泥棒事件でも伯父は警報器の手配をして去ってゆくが、クリスマスの火事は家族を「洋館」から脱出させる契機となる。「洋館」の歴史とともにあったコピトカバのボチ子が、火事の夜にひっそりと最期を迎えたのは、「フレッシー動物園の終焉」であると同時に、「洋館」の終焉を意味している。

だが、伯父の不在という状況への打開は、期限付きの家族であった朋子によって成し遂げられる。それはただ伯父の会社の「フレッシー」の広報誌を、「伯母さんが見つけた誤植、ヌレッシー、に大きな丸をつけ、ベントツのワイパーにはさんだ」だけである。だがこの行為によってミーナの母の思いはその夫に届き、伯父は帰って来る。それ以降、ミーナの喘息は快方に向かう。思えばミーナの喘息とは、母にケアの待機という役割を授け、母を引き留めるものだった。だが二年後に米田さんが亡くなり、翌年ローザが亡くなったとき、ミーナは中学の卒業式すら待たずに「スイスの寄宿学校」へ出発する。こうして伯母は、ミーナの喘息や姑の老衰へのケアに備える必要から解放される。そして「洋館」は伯父伯母だけになり、閉じられたケアの場所でもなくなるのである。

朋子が伯母を危機から救えたのは、朋子がいつかこの「洋館」からでてゆく期限付きの家族であったからだろう。伯父の別宅へ行ったもとの理由は、「発作を起こし、甲南病院に入院」中のミーナが仄かに心を寄せる「水曜日の青年」の動向を探ることであった。しかし、根本の原因は伯父の不在にあることに朋子は無意識のうちに気づくのだ。阪神尼崎駅から梅田駅。その「迷路」のような梅田駅から地下鉄で江坂駅。そこから郵便局、接骨院、公民館、そして「江坂ロイヤ

ルマンション」へという朋子の（歩き）。それは小学一年生で父を病気で喪った朋子が、別の意味で父の不在に耐えているミーナの「味方」になるための「行進」だったのだ。

### 三、一九七二年の物語

井上ひさしは先述の「選評」で、『ミーナの行進』を「物語的背負投げの傑作」し、次のように述べている。

大豪邸に引き取られた貧しい母子家庭の少女——よくある設定だ。たいていの場合、物語的圧力を高めるために、「私」は意地の悪い使用人や、富豪のひねくれた娘から苛めつけられることになっているが、この小説では、使用人は「私」にやさしく、病弱の従妹のミーナは、「私」をじつの姉のように思ってくれる。（中略）たいていの物語では、このマッチで火事になることになっているが、ミーナは火事をおこさない。（中略）たいていの物語では女主人公が伯父さんに意見をするとところが山場になるが、「私」はなんにもしないのだ。<sup>(13)</sup>

井上という「物語的背負投げ」とは、「よくある設定」でありながら、「たいていの物語」の常道からは外れてなにも起らないという「関節外し」の展開を指している。しかし池澤夏樹は、その「関節外し」であることを、むしろ否定的に「一つ一つの話が、ことが成就しない形で閉じられる」と指摘し、「屋敷を出たところは、外の世界は、本当の一九七二年なのだろうか？ ファンタジーはこの屋敷の中にだけ偏在するのだろうか？」<sup>(14)</sup>と批判した。

要するに『ミーナの行進』とは、「よくある設定」や「ことが成就しない」という点で、肯定的にも否定的にも評価される作品なのだ。しかしこれは先に述べたように、負の側面をリアル描くという方法をとらない小川作品の特徴に関わって

いる。ここでは榎木野衣のいうシミュレーションイズムという概念を手掛かりに考えてみたい。

原形を模した二次的コピー、模倣という意味がシミュラクルであるが、シミュレーションイズムとは、そのシミュラクルの自己増殖の時代が現代であると規定したボードリヤールの理論<sup>15</sup>を、芸術に応用した特質や主義を指していると考えたいだろう。榎木は美術史におけるシミュレーションイズムの価値を論じ、その特徴を「初めてみたはずなのにどこかで見覚えがあつて、一種のデジャヴ<sup>16</sup>、つまり既視感に結びついている」とし、「入念に意図された人工的なノスタルジー」と定義する。

小川洋子は沼野充義との対談<sup>17</sup>で、子供のころの読書体験について「子どものための世界文学全集」挙げ、次のように続けて語っている。

第一回の配本が『家なき子』だったことはよく覚えています。その『家なき子』あたりから、だんだんとお話の世界に引き込まれてゆき（中略）バーネットの『秘密の花園』を読み、『小公女』を読み、『長くつ下のピッピ』や（中略）『トムは真夜中の庭で』に至る、という具合です。

『ミナーの行進』は、ここに挙げられたような、親を失った、あるいは親から離れた子どもの物語に似通っている。だが朋子は孤児状態のようでありながら、結末では母が約束通り迎えに来て岡山のもと暮らしに戻ってゆく。それは「ことが成就しない」点で、井上のいう「物語の関節外し」になっている。

だが『ミナーの行進』とは、『秘密の花園』などの孤児物語の意図的な（模倣）であつて、起源への回帰や超越が目指されているのではないのだ。孤児物語だけでなく、見知らぬ親戚に引き取られる子ども、豪邸での歪んだ生活、病弱な美少女、子どもに寄り添う動物、マッチで火をともし少女などが描かれた児童文学や少女小説などの懐かしい物語を、念入りに混

ぜ合わせて編集し、「人工的なノスタルジー」を醸し出しているのである。

川本は「お伽話の桃源郷」と評し、池澤や筒井は「ファンタジー（ファンタジイ）」<sup>(18)</sup>だとしたのだが、それだけでは足りない。「ミーナの行進」とは、既にあるお伽話やファンタジーを「サンプリングし、ズタズタにカットアップし、飽くことなくリミックス」<sup>(19)</sup>したノスタルジックな（模像）なのである。

「海拔二百メートルのあたり」に建てられたこの「洋館」もまた、海拔の高さ分、現実から遊離している。「洋館」を建てた伯父の父は、「ベルリン大学へ留学し、薬学を修め」、「健胃作用をうたったラジウム入り清涼飲料水（フレッシー）の販売で会社を大きくし」たというが、この「洋館」では凡そ科学的でも医学的でもない健康療法が幅を利かせている。家族総出でミーナの健康を気遣いながら、「何と言っても一番信頼されていたのは、フレッシー」である。「頭が痛い時も、胸がむかむかする時も、憂鬱な気分の時も、とにかくフレッシー」。他にも「光線浴室」という「小部屋」があり、中学生の朋子ですら、「効果あるの？」と「半信半疑で」ミーナに尋ねている。ドイツの薬学の学問的神髄からは程遠い非科学的健康法に支配されたこれら「独特の健康観」は、この「洋館」のリアリティのない空虚さに通じている。

ほかにも「スパニッシュ様式の洋館」、「ドイツの「メルセデス・ベンツ」、「ベーカリーB」のバケットパンとフランス洋菓子「クレープ・シュゼット」など、西洋風なだけの類型的ブルジョア生活が描かれているが、それを俗悪で陳腐だと嫌悪するような批評意識は中学生の朋子にはない。池澤夏樹が「異常に魅力的な伯父の謎めいた不在の理由がかくも凡庸なものである」<sup>(20)</sup>と批判したとおり、確かに伯父は「凡庸」である。問題はその伯父を「異常に魅力的な伯父」として、空疎な「洋館」の魅力と同じように語っていることである。

これこそまさに、シミュレーションニズムの方法なのである。抽象化された憧れの西洋風の要素をコラーージュしているのだ。シミュレーションニズムは、日本文学の本歌取りのようにオリジナルを奥行きとしてその美意識を継承するものではない。むしろ「すべてはたがいに等価で、配置と編集が可能な一種のデータベースと化し」<sup>(21)</sup>ており、キッチンな（模像）である

ことが特徴なのだ。そして留意すべきは、そのキッチュ化を可能にするのが、一九七二年の中学生朋子という隠れ蓑を着て語るといふことだ。空疎な「洋館」や「凡庸」な伯父を、「人工的なノスタルジー」の（模像）として描き出す方法なのである。

さらに、『ミーナの行進』を成り立たせている芦屋という場所も、中学生の朋子によってシミュレーションズムの方法で語られている。小川自身が「芦屋との出会いがなければ、書けない小説だった」と述べたように、『ミーナの行進』にはふんだんに実在の場所がちりばめられている。この小説を片手に、芦屋の町を歩くことが意識されているかのようである。しかし注目したいのは、その（歩き）は「アニメ聖地巡礼」に近似であるといふことだ。「聖地巡礼」とはコンテンツ・ツーリズムのひとつといわれるサブカルチャー作品のファンによる文化現象である。

その（歩き）は、文学散歩ともいわれる小説の舞台を探访するという振る舞いや、小説を「都市空間の解説から逆照射する」前田愛の試みとは異なっている。ましてや、名所旧跡を辿ることや、松尾芭蕉が「白河の関越えむ」と旅立つといった従来型の（歩き）とも異なる。それはアニメのようなフィクショナルなコンテンツよって作られたに土地のイメージから出発して、その地を「聖地」として楽しむ（歩き）である。由谷裕哉によれば、「アニメ聖地巡礼」は「（１）自己言及的な記念行為を含むこと、（２）苦行性、（３）反復性、（４）祈願を伴う場合があるところ」において「巡礼」を継承しているという。もちろん、インダス河へ向かう仏教徒やルルドの泉を訪れるカソリック信者の「巡礼」とは切実さにおいて次元が異なり、信仰があるわけではない。だが「聖地」「巡礼」と名づけられる通り、ある種の神格化と感溺を伴うようだ。『ミーナの行進』はそのような感性を惹きつける。読者は『ミーナの行進』の「人工的なノスタルジー」性を十分に納得したうえで、この小説で作られた芦屋という町のイメージを味わうのである。「Aという名の洋菓子屋さん」をアンリ・シャルパンティエとし、「ペーカリーB」をビゴの店として「聖地」化する。そして洋菓子店で演じられるクレープ・シユゼットのゆかしい作り方を、神社でお祓いを受けるかのように神妙に拝して味わう。それは『ミーナの行進』というフィクシヨ

ンよって作られたにイメージをオリジナルとして出発し、そののち芦屋という現実の町を再認するという倒錯した感性である。ここでは、その土地の歴史の重みも重厚な真実も志向されてはいない。独特の軽さ、薄さ、チープでキッチュな〈模像〉として描かれた芦屋を、「聖地」に見立てて「巡礼」する陶醉を楽しむのである。

芦屋がイメージから出発した〈模像〉の「聖地」であったように、一九七二年もまた〈模像〉の「聖」なる時間でしかない。先に引用した「選評」で、池澤が「屋敷を出たところは、外の世界は、本、当、の、一、九、七、二、年、な、の、だ、ら、う、か？」と述べているように、『ミーナの行進』の一九七二年は、イメージで塗り潰された一九七二年という物語時間でしかない。山陽新幹線が開通し、川端康成が自殺し、ミュンヘンオリンピックと「黒い九月」による事件、そしてジャコビニ流星雨といった「外の世界」は、歴史の意味などを深く問われることなくカラーージュのように物語に貼り付けられている。

『ミーナの行進』は「本当の一九七二年」など志向せず、イメージとしての一九七二年に彩られ、朋子はそれをあくまで「聖」なる時間として語っている。そしてもちろん、その「聖」とは、「プラスチックのおもちゃ」のクリスマスツリーのようなキッチュな〈模像〉のノスタルジーである。

だがイメージとしての一九七二年ではあっても、そのなかで少女たちは成長を遂げる。井上が「関節外し」と指摘したように、「たいいていの物語」のようなことは「なに一つ成立しない」のだが、少女たちは「洋館」のなかでひそやかにそこからの脱出の準備をしている。

たとえば、川端康成の死が契機となって、朋子は「芦屋市立図書館へ通うように」なり、「黒い九月」の事件から「アウシュヴィッツの写真集」を、ミーナの代理ではなく「自分自身のために初めて借り」る。あるいは図書館の「『大阪・神戸詳細マップ』という本」を片手に、朋子は伯父の別宅を探し当てる。それは「まだ一人で芦屋の外へ出たことがない」と心配する朋子に、図書館司書の「とっくりさん」が言ってくれた「君なら大丈夫。どこへでも、行きたい場所へ行ける」ということばが後押しとなっている。「はるばるドイツから海を渡って運ばれてきた、真鍮製総レース張りの乳母車」に乗っていた

朋子が、「父の自転車」の荷台に乗り、父亡きあと、一九七二年の「山陽新幹線新大阪―岡山間が開通」した翌日に新幹線に一人で乗って「新神戸の駅に降り立」ち、いつしか阪神尼崎駅から梅田、そこから地下鉄に乗る。そして「七二年のジャコビニの時」は「生まれて初めて夜を明かした日」となり、「自分がもう子供ではなくなつたように感じ」るに到る。

また、朋子と同様にミーナも少しずつ成長する。小林さんの孫である赤ん坊を預かつた日、「尻込みしている米田さん」に代わって赤ん坊に「上手にミルクを飲ませる」ミーナは、もはやケアを受けるだけでなく、ケアを与える者となっている。

二人の少女が「洋館」から脱出して「行進」する準備はこうして整えられたのだ。

#### 四. 二〇〇五年のなかの一九七二年

以上のように、「洋館」も芦屋も「聖」なる一九七二年という時間のなかで、〈模像〉として語られていた。だが、もつともファンタジックな存在であるカバのボチ子の死から、『ミーナの行進』は現実へと急降下する。伯父は「洋館」に帰り、ミーナは入院することなく冬を越え、三月には朋子の母が「洋館」にやってきて、朋子は一緒に岡山へ帰ってゆく。

それから三十年以上経つた二〇〇五年の朋子の語りへと帰還した『ミーナの行進』は、〈模像〉として語られた芦屋の「洋館」の浮遊性に、二〇〇五年の現実の重石がかけられている。一九九五年の阪神淡路大震災を越え、朋子は四十歳代半ばとなり、図書館で働いている。「一番下」の息子は高校生である。朋子が歩く芦屋にあるのは、「洋館」ではなく、「化学会社の寮と、マンション」だ。そしてケルンで過ごすミーナも、「旧東ベルリンの地区」で「今では他人の家」になっているローザ一家が暮らしていたアパートを見つける。この二人の〈歩き〉は、「聖地巡礼」ではなく、現実の芦屋とベルリンに降りてきたようだ。



既に母となつてゐる朋子は、かつての自分の母が一人娘を一年間姉に託したときの思いも、夫に去られながら病弱な娘と老齡の姑と暮らす伯母の気持ちも理解できるようになつてゐるはずだ。そして自然災害の前に、為す術もなかつた人間の営みの脆弱さも身に染みてゐる。ミーナもまた、「黒い九月」による事件から、ローザの過去、すなわち「ベルリンのアパート」から姉の「イルマさんの一家は全員連れ去られ」て「収容所のガス室へ送られた」ことを、歴史の重みとともに受け取つてゐる。老齡になつた伯父伯母がミーナとともにその場所を訪ねるのは、供養であり、本当の意味での「巡礼」なのである。

二〇〇五年の朋子が語つた一九七二年の芦屋の「洋館」の物語は、「人工的なノスタルジー」を醸し出す〈模像〉である。それは二〇〇五年の朋子が、一九七二年の朋子という隠れ蓑を着て語るといふ方法によつて可能になつたのだ。

そこにはあつたはずの「本当の一九七二年」といふ現実には直接的には語られない。帰る故国のないローザ、帰るべき家に帰らない伯父、精神的危機にある伯母、苦境にあるシングルマザーの母なども、「聖」なる時間のなかの〈模像〉として語られているだけだ。それはちょうどミーナがマツチ箱に書いたお話のように、閉じ込められた寓話に過ぎない。だがマツチ箱こそが、「ミーナにとつての遠出の時間」であり、ここでは「好きな場所を旅」し、「ポチ子を連れて」「行進してゆく」ことができたように、一九七二年の「洋館」の物語は、朋子の「記憶の支柱」である。

小川は沼野との対談「どうしても物語が必要だ×小川洋子」<sup>(註)</sup>で次のように語る。

あまりにも現実が複雑です。その複雑さを自分の心におさめるため、ほとんど本能的に人は、現実の中に意味を見出そうとします。現実には隠された、現実を超える、フイクション。理不尽を必然に変える、と表現してもいいのかもしれない。(中略)それが物語の原点なんだと思います。

二〇〇五年の朋子が意図的に排除するのは、「本当の一九七二年」の「複雑さ」である。そしてマツチ箱のお話のような「洋

館』の一九七二年の物語は、二〇〇五年の朋子が「その複雑さを自分の心におさめるため」の「現実を超えるフィクション」なのである。

加えて、二〇〇五年の朋子にとって一九七二年がかけがえのない「聖」なる日々とされるのは、朋子が図書館と出会ったのが一九七二年だからだ。川端康成の死と、「黒い九月」の事件は朋子を図書館へ導いてゆく。『ミーナの行進』は、朋子が図書館と出会い、図書館で働くことになった起点を語る物語でもある。

## おわりに

『ミーナの行進』をケアの理論から、朋子の母とミーナの母という姉妹が現実的には苛酷な状況にあることを読み解いた。そしてその苛酷な状況は、シミュレーションニズムの方法によって、生々しい現実へのベクトルを指向しないキツチュな柄のなかに、〈模倣〉としての「洋館」や芹屋とともにはめ込まれていることを明らかにした。そのように負の側面を排除して語ることを可能にしたのは、二〇〇五年の朋子が、中学生だった一九七二年の朋子という隠れ蓑を着て語っているからである。

現代の小説でケアを描くことは、えてして現実の負の側面を振り出す傾向にある。たとえば金原ひとみの『マザーズ』（新潮社、二〇一一）は、薬物中毒や婚外妊娠、子供への虐待など育児をする母の闇を描き、桐野夏生の『ハピネス』（光文社、二〇一三）や角田光代の『森に眠る魚』（双葉社、二〇〇八）は、育児の孤独感と表裏一体の「ママ友」の軋轢を描く。母にとって育児は重荷となり、子どもは貧困、孤立、虐待といった禍々しい運命に巻き込まれる。

しかし『ミーナの行進』には、一時的であれ家族を失ったかにみえる朋子が、期限付きの家族として「洋館」の家族に支えられ、その家族を変えてゆく。逆からみれば、夫と死別した妹と夫を失いつつある姉という姉妹の不運が、その子ど

もに出会いと成長を与えたことになる。そして結果的に姉妹は子どもによってよりよい人生に導かれたのだ。更に朋子は、一九七二年の外の世界におこった現実の事件をきっかけに図書館と出会い、仕事にしてゆくのである。

同じような小川の小説としては、『猫を抱いて象と泳ぐ』（文藝春秋、二〇〇九）と『博士の愛した数式』がある。前者では、両親のいない少年がバス会社の寮の管理人「マスター」<sup>(28)</sup>と出会って、チェスを教わり才能を開花させてゆく。また後者では、シングルマザーの母をもつ「ルート」が、「家政婦」の母の派遣先で「博士」に出会い、のちに数学の教員になる。両作も『ミーナの行進』も現実をリアリティある手法では扱ってはいない。まさに「現実を超えるフィクション」として、仮想ゆえの可能性を提示している。一面、痛ましくもある運命を、決して不幸とは受け取らず、むしろ新しい出会いのある人生として子どもが自ら「行進」していくことを、祈りにも似たかたちで描いているのだ。

小川は谷崎潤一郎賞の受賞に際して「文学的近況 蛹のような小説」<sup>(29)</sup>と題し、次のように述べている。

作家になってもやはり（中略）どこかに閉じ込められる小説ばかり書いてきた。（中略）しかしそろそろ、外の世界へ脱出してゆく小説も書いてみる必要があるかもしれない、と思い始めた。

『ミーナの行進』では、二〇〇五年が描かれることで、少女たちが「洋館」から「外の世界に脱出してゆく小説」になった。一九七二年は少女たちにとって、世界に旅立つ準備をしている「蛹のような」時間であったのだ。そして小川にとって『ミーナの行進』は、「閉じ込められる小説」から、主人公たちを「外の世界に脱出」させる新しい小説にもなった。

- 1 引用は『ミーナの行進』（中央公論新社、二〇〇六）に拠る。そのほかの小説は、単行本の出版社・出版年のみ示す。
- 2 「選評」（『中央公論』二〇〇六、一一）。選考委員は、井上ひさし、池澤夏樹、筒井康隆、川上弘美。

- 3 箕野聡子「小川洋子「ミーナの行進」考 死と孤独と安住できる場所」『阪神近代文学研究 第13号』二〇二二、九。
- 4 川本三郎「小さな博物館に飾られた美しいもの」『文藝』二〇〇九、八。
- 5 厚生労働省 <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/000188138.html> 閲覧日：2018.12.28
- 6 赤石千衣子『ひとり親家庭』（岩波新書、二〇一四）。ただし、赤石の分析は「二〇一一年全国母子世帯等調査」に基づく。
- 7 引用は『博士の愛した数式』（新潮文庫、二〇〇五）に拠る。
- 8 注5に同じ。
- 9 赤石千衣子（注6に同じ）。
- 10 岡野八代『フェミニズムの政治学 ケアの倫理をグローバル社会へ』（みすず書房、二〇一三）。
- 11 エヴァ・フェダー・キテイ『愛の労働 あるいは依存とケアの正義論』（岡野八代ほか監訳、現代書館、二〇一〇）。
- 12 箕野聡子（注3に同じ）。
- 13 井上ひさし（注2に同じ）。
- 14 池澤夏樹（注2に同じ）。
- 15 ジャン・ボードリヤール『象徴交換と死』（今村仁司・塚原史訳、ちくま学芸文庫、一九九二年）参照。
- 16 榎木野衣『増補 シミュレーションニズム』（ちくま学芸文庫、二〇〇二）。
- 17 沼野充義編著『8歳から80歳までの世界文学入門 対話で学ぶ〈世界文学〉連続講義4』（光文社、二〇一六）。
- 18 池澤夏樹・筒井康隆（注2に同じ）。
- 19 榎木野衣（注16に同じ）。
- 20 池澤直樹（注2に同じ）。
- 21 榎木野衣（注16に同じ）。
- 22 小川洋子「文学的近況 蛹のような小説」（『中央公論』二〇〇六、一一）。
- 23 由谷裕哉「序章」（由谷・佐藤喜久一郎『サブカルチャー聖地巡礼 アニメ聖地と戦国史蹟』岩田書院、二〇一四）。
- 24 増淵敏之『物語を旅する人々 コンテンツ・ツーリズムとは何か』（彩流社、二〇一〇）参照。

- 25 前田愛「あとがき」(『都市空間のなかの文学』一九八二、筑摩書房)。引用はちくま学芸文庫版(一九九二)に拠る。
- 26 由谷裕哉(注23に同じ)。
- 27 注17に同じ。
- 28 引用は『猫を抱いて象と泳ぐ』(文春文庫、二〇一一)に拠る。
- 29 小川洋子(注22に同じ)。